

日韓大学生随筆の対照分析

—「手」をテーマにした随筆を中心に—

文 智 咲

1. はじめに

本稿では、日本語母語話者の日本語の随筆と韓国語母語話者の韓国語の随筆とを対象として¹、文章論的観点から日韓対照分析を試みる。

本稿で分析の対象とする随筆の特徴とは何だろうか。『日本国語大辞典』（第二版）では次のように定義している。

（1）特定の形式を持たず、見聞、経験、感想などを筆にまかせて書きしるした文章。一方、韓国の『標準国語大辞典』では、次のように定義している。

（2）一定の形式に従わず、人生や自然または日常生活での感じたことや体験を思い出されるままに書いた散文形式の文章。

（1）（2）から日韓両国での随筆の特徴はかなり近いものであると考えられる。

これまで日韓対照の文章論的分析は李2004、伊集院・高橋2004、伊集院・廬2015などによって、意見文を対象として詳細な研究が行われている。一方で、文章のジャンルが限定的であるという問題もあり、特に随筆の文章論的分析は、管見の限り見あたらない。また、先行研究の殆どは日本語母語話者の作文と外国人日本語学習者の日本語作文とを対照している。しかし、外国人日本語学習者の作文は母語の影響が強いこと、学習者の母語ほど日本語の表現を自由自在に書くことができないことなどがあり、問題点として指摘されている。よって本稿では、適切な条件下での資料の収集から始めることにした。

2. 本稿の目的

本稿の目的は随筆の文章論的特徴を明らかにすることである。1節で述べたように、日韓両方で、随筆の定義は主に内容面を取り上げている。文章論的分析を試みる本稿では、内容面だけでなく、書き出し文、結び文の分析を通した文の流れ（広義の文章構成）にも着目して、随筆の特徴を複眼的な観点から捉えることを目指す。

3. 調査概要

調査の概要は次の通りである。

1 より正確に言えば、両国大学生によって随筆を意識しながら書かれた文章ということになるが、便宜的に区別せず「随筆」と呼ぶことにする。

- ・ 時期：2015年10月～11月
- ・ 対象：日本人の大学生：60名（男：18名、女：42名）
 韓国人の大学生：44名（男：22名、女：22名）

調査に当たって、それぞれの大学生に、「[手]」をテーマに随筆を書いてください」と指示し、600字以上書くように指示した。

韓国では、専用の原稿用紙を配布し、分量の上限は設けなかった（ただ、配布した原稿用紙は800字）。日本では、テーマと分量（600字以上）は韓国と同様であるが、提出課題とし、手書き以外にワープロ文書での提出も認めた。

収集された作文は、日本人学生60編、韓国人学生44編である。それぞれの総字数と総文数は次のようになる。

表 1 字数と文数

日本語	総字数	54620	総文数	1465
	平均字数	910.3	平均文数	24.4
韓国語	総字数	28577	総文数	562
	平均字数	649.5	平均文数	12.8

1文あたりの平均字数は日本語の随筆37.2字、韓国語の随筆50.8字であった。表記法の違いもあり単純には比較できないが、韓国語の方が日本語より1文あたりの平均字数が多いことがわかる。

4. 分類基準

本稿では随筆を分類するにあたり文章論的観点から、文章内容全体に注目した観点、書き出しの内容に注目した観点、結び文に注目した観定の以下の3つ（4.1～4.3）の規準を設定した。

4.1 全文内容

随筆全体の内容の類型について、本稿では次のように捉えることにした。

- ・ 題そのものについて語っている。
- ・ 題がきっかけになって題とは違うことについて語っている。
- ・ 書き手²の考え・意見を語っている。
- ・ 書き手の経験を語っている。

上記のような分類基準で随筆を次の4つに分類した(順に対応している)。

- i) 題目評論：題に関する書き手の考え・意見を語るもの

2 本稿でいう「書き手」とは、作文を書いた大学生を指す。

- ii) 題目体験：題に関する書き手の経験を語るもの
- iii) 題目契機評論：題がきっかけとなり、書き手の考え・意見を語るもの
- iv) 題目契機体験：題がきっかけとなり、書き手の経験を語るもの

4.2 書き出し文内容の分類基準

随筆の冒頭文について鈴木1999では次のように指摘している。

- (3) 一番多いのは、最近の身の回りに起こった出来事などから書き始めるものである。かつての体験を振り返って、自分の考えや感想などを述べることもよくみられる。評論に比べて多いのは、いわゆるまくらを置いて始めるやり方である。有名人のことはや格言、和歌・俳句などから話に入ることもある。
(p.109)

以上代表的な書き出しを列挙したものであるが、主観的な指摘に留まり、どのような内容がどの程度見られるのかといった観点が欠如している。よって本稿では、次のような観点を立て、その出現傾向を調査することによって書き出し文の特徴を抽出することを試みる（基本的には結び文についての分析も同様）。書き出し文は下記ⅠとⅡの2つの観点から分類する。

Ⅰ 状況設定

どのように始めるのかといった導入方法からの分類。

- a. 話題提示（「題」を取り上げ書き出す）
 - (4) 手には不思議な力があると私は思う。
- b. 場面提示（時・所・場所から書き出す）
 - (5) 中学生の美術の時間に手の写生をしたことを今でも覚えている。

Ⅱ 表現内容

どのような内容に言及しているのかといった内容面からの分類。

- a. 説明（題に何等かの情報を加え、具体性や関連性を高める。）
 - (6) 人は昔から、コミュニケーションツールとして手を使ってきました。
- b. 主張・意見（題に対して、書き手の評価を示す。）
 - (7) 私は「手」とは人を表す象徴的なものであると考える。
- c. なし（特に書き手の意図は読み取れず、提題をするに留まる）
 - (8) 私の隣の家には母方の祖母の妹夫婦が住んでいる。

4.3 結び文の分類基準

宮城・文2016では、随筆の書き出し文、結び文、それぞれの文末形式と全文内容の関係についての考察を行っており、それぞれ文末表現に特徴的な使用傾向があることを指摘している。一方で、同論文では、形式的な分析に留まっており、書き手が書き出し文を受けてどのように結ぶのかとった文の流れを考慮した分析はなされておらず、文末形式の使用傾向の差がどのような理由に基づくものであるのかと言った検討が十分では

ないと考えられる。よって、本稿では随筆の内容に焦点を当てるため、書き出し文、結び文の内容を文の流れを意識して対応づけて分類・分析し、全文内容との関係を探ることを試みる。結び文の分類基準は、以下の通りである。

A. 主張あり

a. 考え・意見：書き手の考え・意見・感想を語るもの。

(9)「手」には人の暖かい気持ちがたくさん詰まっていると感じた。

b. 意志・希望：書き手の意志、決意、希望を語るものや、読み手への呼びかけ、問いかけで結ぶもの。

(10) そんな「手」をうまく使って感情を共有しあえる人になりたい。

B. 主張なし

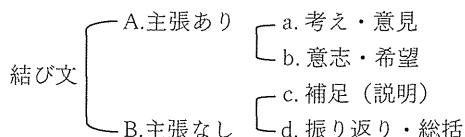
c. 補足（説明）：本文の内容について補足したり説明したりするもの。

(11) 生まれたときの自分の手から、今の自分の手になるまでの過程をスローモーションで見ることができればわかるのかもしれない。

d. 振り返り・総括：本文の内容について振り返ったり総括したりするもの。

(12) あの時の先生の温かな手は私にとって間違いなく魔法の手だった。

以上、結び文の分類の関係を図示すると次のようになる。



5. 結果と分析 I—日本人大学生の随筆

5.1 全文内容

日本人大学生が書いた随筆を、4.1節で示した全文内容ごとに「題目評論」「題目体験」「題目契機評論」「題目契機体験」の4つに分類した。その結果を示すと次のようになる。

表2 日本語随筆の全文内容の分類

全文内容	数	%
題目評論	11	18%
題目体験	31	52%
題目契機評論	3	5%
題目契機体験	15	25%
計	60	100%

日本語の全文内容を見ると、まず、「題目体験」が52%で一番多く、次に「題目契機

体験」が25%を占めている。全文内容が体験を語っている「題目体験」「題目契機体験」は合わせて77%にのぼり、書き手の考え・意見を語っている「題目評論」「題目契機評論」(23%)の3倍以上にものぼる。これは1節で示した随筆の定義、すなわち、「特定の形式を持たず、見聞、経験、感想などを筆にまかせて書きしるした文章」という特徴がよく表れている結果であると言える。図示すると、次の図1のようになる。

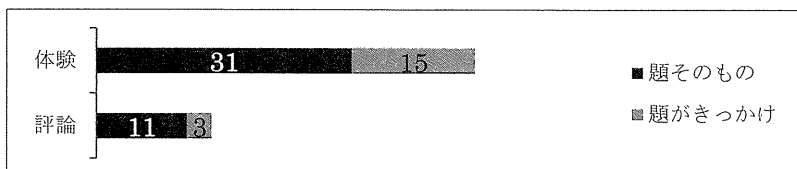


図1 全文内容の分類(日)³

5.2 全文内容と状況設定の関係

本節では、全文内容と状況設定の関係について分析を行う。状況設定とは、前述したように書き出し文の内容を、話題を提示している「話題提示」か、それとも時・所・場所から語り始める「場面提示」かによって分類したものである。全文内容と状況設定の関係を示すと、次の図2のようになる。

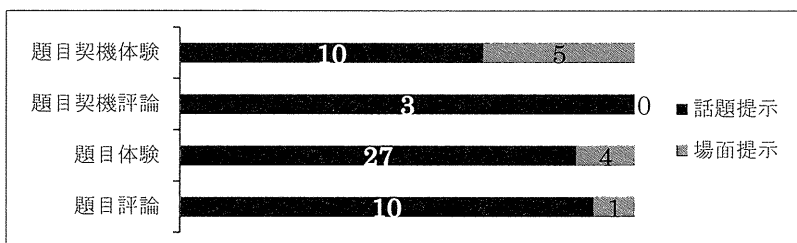


図2 全文内容と状況設定の関係(日)

日本人大学生の随筆では、全60編のうち、「話題提示」が50編(83%)、「場面提示」が10編(17%)で、全文内容にかかわらず、書き出し文では、「話題提示」の方が多いという結果になった。

全文内容との関係を見てみると、体験を語っている「題目体験」「題目契機体験」(「場面提示」20%)の方が、題についての考え・意見を語っている「題目評論」「題目契機評論」(「場面提示」7%)より「場面提示」の比率が2倍以上高い。これは、全文内容が書き出し文の内容と連動的であることを示しており、宮城・文2016を裏付ける結果となった。

3 以下、図または表の(日)は日本人大学生の作文、(韓)は韓国人大学生の作文を指す。

5.3 全文内容と表現内容の関係

前述したように、書き出し文の表現内容は「説明」「主張・意見」「なし」の3つに分けられる。「説明」は、題に何らかの情報を加え、具体性や関連性を高めるもの、「主張・意見」は題に対して、書き手の評価を示すもの、「なし」は特に書き手の意図は読み取れず、場面を規定するだけで、提題に留まるものである。

全文内容と表現内容との関係を図に示すと次のようになる。

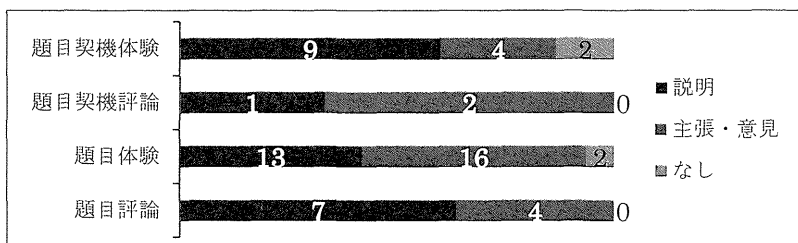


図3 全文内容と表現内容の関係（日）

書き出し文は文全体の内容を予告する重要な働きがあるので、具体的な導入がない「なし」は7%しか見られない。この観点から特徴的な偏りは見いだしにくく、比率としてはおよそ説明50%、主張・意見43%で説明が若干多いものの差はそれほど大きくない。

5.4 結び文の分類結果

結び文の分類結果を示すと次のようになる。

表3 結び文の分類（日）

A. 主張あり	a. 考え・意見	19	32%
	b. 意志・希望	31	52%
B. 主張なし	c. 補足（説明）	5	8%
	d. 振り返り・総括	5	8%

「A. 主張あり」とは、結び文で書き手の「a. 考え・意見」を語るものや、書き手の「b. 意志・希望」を語るものである。「B. 主張なし」とは、結び文で「c. 補足（説明）」を付け加えるもの、「d. 振り返り・総括」としてまとめるものである。

結び文では、「A. 主張あり」が圧倒的に多く（84%）、その中でも、「b. 意志・希望」を語るもの（52%）が一番多かった。

全文内容別の分布を示すと次のようになる。

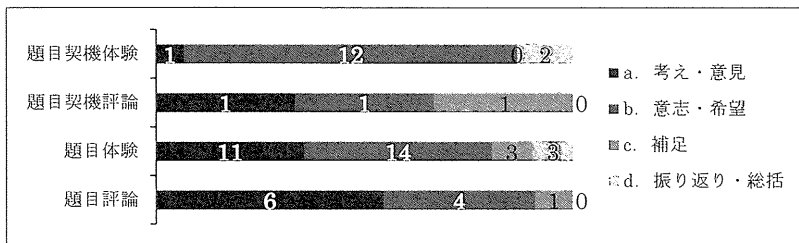


図4 全文内容と結び文の関係（日）

全文内容が体験を語る「題目体験」「題目契機体験」では、結び文で「a. 考え・意見」を語るものが26%、「b. 意志・希望」を語るものが57%で、「b. 意志・希望」が6割近くを占める結果となった。

一方、全文内容が考え・意見を語る「題目評論」「題目契機評論」では、「a. 考え・意見」が50%（7例）、「b. 意志・希望」が36%（5例）であった。

以上のことから、体験を語る随筆では、「a. 考え・意見」を語る随筆よりも「b. 意志・希望」で結ぶ傾向が強いと考えられる。

6. 結果と分析Ⅱ一日韓対照

6.1 全文内容

韓国語の全文内容の分類結果を示すと次のようになる。

表4 全文内容の分類（韓）

全文内容	例数	率
題目評論	17	39%
題目体験	14	32%
題目契機評論	5	11%
題目契機体験	8	18%
計	44	100%

韓国人大学生の随筆では、題についての考え、意見を語っている「題目評論」が39%で一番多く、次に題についての体験、経験を語っている「題目体験」が32%で二番目に多かった。日本人大学生の随筆では、「題目体験」（52%）が一番多く、「題目契機体験」が25%であったのとは違う結果となっている。

韓国人大学生の随筆では、体験を語っているのは「題目体験」「題目契機体験」合わせて50%で、書き手の考え・意見を語っている「題目評論」「題目契機評論」と同様の比率であった。日本人大学生の随筆では体験が77%で、考え・意見を語っているのは23%に過ぎないのとは大きく違うところである。以上のことをまとめると、次のよう

になる。

(11) 全文内容の割合順

日本：題目体験＞題目契機体験＞題目評論＞題目契機評論

韓国：題目評論＞題目体験＞題目契機体験＞題目契機評論

(12) 全文内容の割合

日本：体験（77％）＞評論（23％）

韓国：体験（50％）＝評論（50％）

6.2 書き出し文の分類—状況設定

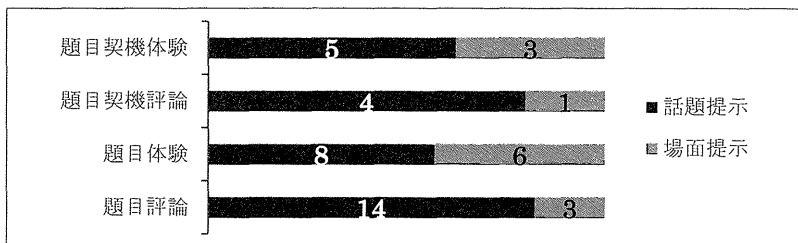


図5 全文内容と状況設定の関係（韓）

韓国人大学生の随筆では、書き出し文が「話題提示」を表すのが70%、「場面提示」が30%で、「場面提示」は日本語（17%）より多かった。全文内容を、体験を表すものと評論を表すものに分けて見ると、体験を表す「題目体験」「題目契機体験」では「話題提示」が59%、「場面提示」が41%であった。

一方、考え・意見を表す「題目評論」「題目契機評論」では、「話題提示」が82%、「場面提示」が18%で、全体的には「話題提示」が多いものの、日本語と同様、書き手の考え・意見を語る評論より体験を語る随筆の方で、書き出し文が「場面提示」を表す割合が高いことが分かった。

また、全文内容が体験を語る随筆での「場面提示」の比率は韓国語（41%）の方が日本語（20%）の2倍以上あることから、韓国人大学生は随筆を書く際、体験を語る場合は書き出し文で「場面提示」をしてから話を続ける割合がより高いと言える。以上のことをまとめると、次のようになる。

(13) 全文内容と状況設定の関係

a. 日本：「話題提示」（83%）＞「場面提示」（17%）

- ・全文内容が体験を表すもの：「話題提示」（80%）＞「場面提示」（20%）
- ・全文内容が評論を表すもの：「話題提示」（93%）＞「場面提示」（7%）

b. 韓国：「話題提示」（70%）＞「場面提示」（30%）

- ・全文内容が体験を表すもの：「話題提示」（59%）＞「場面提示」（41%）
- ・全文内容が評論を表すもの：「話題提示」（82%）＞「場面提示」（18%）

宮城・文2016では、「秋」という題で日韓大学生の随筆を分析しており、全文内容と状況設定の関係について考察している。

(14)「秋」を題にした随筆の全文内容と状況設定（宮城・文2016）

日本⁴：「話題提示」（65％）＞「場面提示」（35％）

宮城・文では、本稿の分類と違い、全文内容を3つに分類しているため、単純に比較することはできない。が、「話題提示」と「場面提示」の割合の差が（13a）に示す日本語ほど激しくない。このような差が出たのは、「秋」という題が「手」という題に比べ、より「場面提示」になりやすいからであると考えられる。

6.3 書き出し文の分類—表現内容

まず、書き出し文が「説明」を語るのは30％、「主張・意見」を語るのは70％で、韓国では、書き出し文の表現内容は「主張・意見」の方が多かった。日本では「説明」が「主張・意見」よりやや多い。以上のことをまとめると、次のようになる。

(15) 書き出し文の表現内容

a. 日本：「説明」（50％）＞「主張・意見」（43％）＞「なし」（7％）

b. 韓国：「説明」（30％）＜「主張・意見」（70％）

全文内容と表現内容の関係を図に示すと次のようになる。

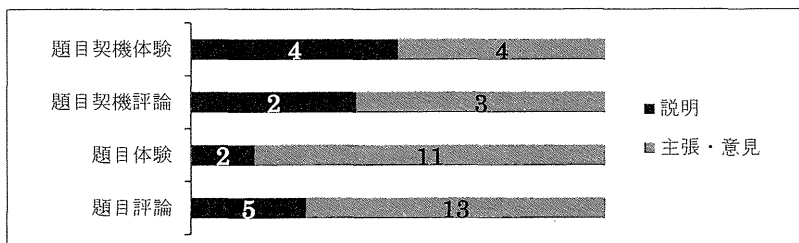


図6 全文内容と表現内容の関係（韓）

6.4 結び文の分類

結び文の分類結果を示すと次のようになる。

表5 結び文の分類（韓）

A. 主張あり	a. 考え・意見	23	53%
	b. 意志・希望	19	43%
B. 主張なし	c. 補足（説明）	1	2%
	d. 振り返り・総括	1	2%

4 宮城・文2016では、韓国語の場合、文末形式だけを取り上げているため、本稿との比較はできない。

結び文の分類では、韓国語でも「A. 主張あり」の方が圧倒的に多いという結果となった。日本語では「b. 意志・希望」を語るものが5割以上で一番多かったが、韓国語では結び文で書き手の「a. 考え・意見」を語るものが一番多いという結果となった。以上のことをまとめると、次のようになる。

(16) 結び文の分類

- ・日本：A. 主張あり（84%）＞ B. 主張なし（16%）
 - b. 意志・希望（52%）＞ a. 考え・意見（32%）＞ c. 補足（8%）＝ d. 振り返り
 - ・韓国：A. 主張あり（95%）＞ B. 主張なし（5%）
 - a. 考え・意見（53%）＞ b. 意志・希望（43%）＞ c. 補足（2%）＝ d. 振り返り
- 全文内容と結び文の関係を図に示すと次のようになる。

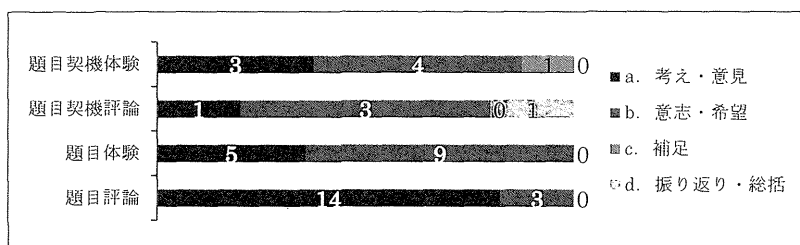


図7 全文内容と結び文の関係（韓）

全文内容が体験を語る「題目体験」「題目契機体験」の場合、結び文で「b. 意志・希望」を語るものが59%で一番多く、「a. 考え・意見」を語るものは36%であった。

一方、全部内容が考え・意見を語る「題目評論」「題目契機評論」の場合は、結び文で「a. 考え・意見」を語るものが68%で一番多く、「b. 意志・希望」を語るのは27%、「c. 補足」を語るのは5%であった。

以上の結果は、日本語の随筆と同様である。つまり、日韓両方で、体験を語る随筆では、結び文で意志・希望を語って結ぶ傾向があり、考え・意見を語る随筆では、結び文で書き手の考え・意見を語って結ぶ傾向があるということである。

7. おわりに

以下、本稿の考察をまとめる。

- ・日本人大学生の随筆では、考え・意見を述べるより体験を述べる傾向が強い。
- ・書き出し文では、日韓両方で場面提示より話題提示が多く使われる傾向にある。
- ・韓国人大学生の随筆では、体験を述べる文章を書く時、書き出し文で場面提示を語る割合が上昇する。
- ・体験を語る随筆では、結び文で意志・希望を語る傾向があり、考え・意見を語る評論的な随筆では、結び文で書き手の考え・意見を語って結ぶ傾向がある。これは日

韓両方で同様の結果となった。

本稿では、日韓大学生の随筆を分析し、それぞれの随筆を文章論的観点から分析し、それぞれの文の流れの特徴を記述することを試みた。全文内容、書き出し文、結び文といった限定的な観点からの考察ではあるが、1節でも述べたように、日韓対照の文章論的分析は現在進行途上の課題であり、本稿では随筆の分析に留まるものの一定の成果を得ることができたと考えている。分析をより精緻なものにするために、多様なテーマで、さらにより大量のデータを用いた調査が必要となるが、今後の課題としたい。筆者らの研究グループは、現在大学生を対象とした日韓対照の文章ジャンル別大規模作文コーパスの構築を企画・進行しており、その概要については別稿を準備している。本稿で挙げた課題もいずれ解消される方向に進むと考えている。

本稿の考察の結果は大学における文章表現法及び日本語教育の作文指導への応用、さらには日本語母語話者への韓国語教育への活用も期待される。

参考文献

- 李貞暎 2001「文章構造の日韓対照研究—新聞の社説における書き出しを対象として—」『言語文化と日本語教育』21、お茶の水大学日本言語文化学会、社会言語科学会、pp.96-109
- 李貞暎 2004「新聞社説における日韓の文章展開の方法に関する一考察—第1文と第2文を中心に—」『表現研究』80、表現学会、pp.66-75
- 伊集院郁子・高橋圭子 2004「文末モダリティに見られる“Writer/Reader visibility”—中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123、日本語教育学会、pp.86-95
- 伊集院郁子・盧姪鉉 2015「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴—日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較—」『社会言語科学』18-1、pp.147-161
- 市川孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 市川孝 1978『新訂 文章表現法』明治書院
- 佐久間まゆみ 1995「中心文の「段」統括機能」『日本女子大学 紀要 文学部』44、日本女子大学、pp.93-109
- 鈴木英夫 1999「文章の構成」『講座 日本語と日本語教育』5、明治書院、pp.84-116
- 永野賢 1972『文章論詳説』朝倉書店
- 宮城信・文智暎 2016「日韓大学生の作文に見る随筆の対照分析—文末表現と文の展開の連関—」、韓国日語教育学会学術大会発表資料

(ムン ジーヨン 日本女子大学 学術研究員／非常勤講師)